

### 3. 基調講演・シンポジウム

【7月4日（土）14:00～16:40】（B会場）

#### 【講演・シンポジウム】

#### 次期学習指導要領における新生家庭科を考える

##### －開かれた教育課程のなかで家庭科は何ができるか－

##### 趣旨

2017年・2018年に告示された現行学習指導要領では、学校と社会が目標を共有し、連携・協働して子供を育てる「社会に開かれた教育課程」の理念が掲げられた。これにより、新たな時代に求められる資質・能力を基盤とした学力観に基づく学習の推進が明確に打ち出されている。こうした流れを受け、2025年12月の例会では、AI時代における家庭科の在り方に焦点をあてて議論した。

現在、次期学習指導要領の改訂に向けた議論が進んでおり、論点整理（令和7年9月）では、『主体的・対話的で深い学び』の実装」「多様性の包摂」「実現可能性の確保」の3つの方向性が示された。とりわけ「主体的・対話的で深い学び」の実装については、現行学習指導要領でも掲げられている授業改善を通じた資質・能力の育成を一層具現化することが目指されている。そのためには、単発の授業改善に留まらず、題材や教科、学年を越えた連携や、学校段階間の連携・接続による「学びの連続性」を確保することへの留意が求められている。

家庭科教育は、子どもを取り巻く家庭環境、社会環境、学習環境が大きく変わる中で、生活主体としての資質・能力を育むことをめざして、理論研究や実践研究を進めてきている。今後も、未来を生きる人材の育成に向けて、家庭科の本質や特徴を強みとし、子どもの思考に沿うカリキュラムや授業の改善を進める必要がある。

そこで、第69回大会では、中央教育審議会教育課程部会長である奈須正裕氏を講師に迎え、求められる学力や授業づくりについての講演をいただき、家庭科授業や教員養成・教員研修に関わる4人のシンポジストと共に、開かれた教育課程の中で、家庭科がどのような役割を果たし生活の質の向上に貢献できるのかについて議論する。

#### 基調講演 「次期学習指導要領の学力論と授業づくり－家庭科に期待すること－」

講師 奈須 正裕 氏 （上智大学 教授，中央教育審議会教育課程部会長）

#### シンポジウム

シンポジスト 奈須 正裕 氏  
池田理恵子 氏（山梨県 甲州市立塩山南小学校 教諭）  
遠山麻依子 氏（新潟県 新潟市立光晴中学校 教諭）  
中村 誉子 氏（広島県教育委員会 指導主事）  
志村 結美 氏（山梨大学 教授）  
コーディネーター高木 幸子 氏（日本家庭科教育学会副会長）

## 基調講演講師

奈須正裕（なす まさひろ）氏

上智大学総合人間科学部教育学科教授。中央教育審議会教育課程部会長

徳島大学教育学部卒、東京大学大学院修了。専門は教育方法学、教育心理学。楽しくて力がつく授業づくりを目指して、学校と連携しての授業づくり、カリキュラム開発に取り組んできた。主な著書に『資質・能力』と学びのメカニズム』（東洋館出版社）、「個別最適な学びの足場を組む」（教育課程研究所）など。

### 基調講演「次期学習指導要領の学力論と授業づくりー家庭科に期待することー」

次期学習指導要領では、現行の資質・能力＝コンピテンシーを基盤とした学力論の「熟成」を目指す。コンピテンシーとは「有能さ」という意味で、環境内の事物・現象や言説に適切に働きかけ、効果的に処理できるかを問う概念である。質の高い問題解決が自分らしくできることであり、すると自分らしく生きていけるし、よりよい社会をつくることにも貢献できる。まさにウェルビーイングの達成であり、それを支える潜在的な可能状態が有能さ＝資質・能力である。

学校教育は、子どもたちが一生涯の間に出合う様々な問題場面の解決に必要な有能さの実現を目指す。各教科はその特質に応じて、有能さの顕在化や洗練を担う。そこでは、仮にコンテンツとして類似の事柄を教えたとしても、実現される有能さが質的に異なれば、その教科ならではの独自の貢献となる。コンテンツ的には社会科や総合的な学習と重なることもある家庭科において、この視点は重要である。あらためて家庭科は、子どもの有能さの実現にどのような独自性や可能性を有しているのか。それはどのような中核的概念を拠り所としたカリキュラムによって、よりよく構成されるのか。これらのことを丁寧に吟味する作業が、新生家庭科の出発点において強く求められている。

## シンポジウム

### シンポジスト

奈須 正裕 氏（基調講演講師）

池田 理恵子 氏（山梨県 甲州市立塩山南小学校 教諭）

現山梨県甲州市立塩山南小学校教諭。公立及び山梨大学教育学部附属小に20年以上勤務。山梨大学教育学部附属小では家庭科を担当。現任校ではLDX指定・生成AIパイロット校の研究主任を4年間務める。現在は山梨大学へ内地留学中。

報告1：家族の一員として生活をよりよくしようと工夫する児童の育成を目指して

ー自分や家庭の生活の中の問題発見・課題解決を核とした小学校の授業実践よりー

## 遠山 麻依子 氏（新潟県 新潟市立光晴中学校 教諭）

新潟市立光晴中学校 教諭 家庭科主任 総合学習担当  
新潟大学教育人間科学部 卒業  
新潟県・新潟市で中学校教員として 20 年勤務

**報告 2：**「開かれた教育課程」の中で家庭科ができること  
－教科等横断的な学習「性教育講座」の実践紹介－

## 中村 誉子 氏（広島県教育委員会 指導主事）

広島大学大学院修了。広島県高校家庭科教諭（18 年）や県教育センター指導主事を経て、現在  
県教育委員会高校教育指導課指導主事 4 年目。高校家庭科「ホームプロジェクト」を軸としたカ  
リキュラム検討がテーマ。

**報告 3：**「生徒の探究の質を向上させる家庭科カリキュラムの実践と 3 年間を見通した指導」

## 志村 結美 氏（山梨大学 教授）

山梨大学大学院総合研究部教育学域教授  
東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科修了。博士（教育学）。高等学校家庭科教諭、香川大  
学を経て、2006 年度より現大学に勤務。附属中学校校長、男女共同参画推進室室長等を務め  
る。研究テーマは家庭科教育におけるキャリア教育、教員研修他。

**報告 4：**未来を生きる子ども達に家庭科教育ができること